

アポリネール

「動物詩集 - オルペウスとお供の行列」より

市川 裕見子 訳

オルペウスⁱ

居並ぶ列の、その赫々たる威力、
そして高貴なることをたたえよ：
それは知の光明のあまねく聞かしめる声であり、
何層倍にも偉大なヘルメスが『ピマンドル』ⁱⁱで語っているあの声なのであるから。

カメ

トラキアの不可思議なる、おお狂乱よ！
私のたしかな指が豎琴を奏でる。
獣たちはその楽の音に行進する
カメの甲羅の豎琴の、生みだす唄の数々に。

馬

私が鮮明に見た辛い夢は、おまえにのしかかることもできるのだ、
私の宿命は金の二輪戦車に乗って、おまえの美しき馭者となるだろう
その宿命は、狂気という手綱をしっかりと握っている、
かくしてわが詩句は、あらゆる詩の手本ともなろう。

チベットの山羊

この山羊のしっぽも、そしてイアーソンが苦勞のあげく手に入れた
あの金羊のしっぽさえ、
私の心を奪う髪の毛に比べれば
一文の価値もない。

ヘビ

おまえは美女に喰らいつく。
かくしてどれだけの女性が
その残虐の犠牲となったことか！
エヴァ、エウリュディケー、クレオパトラ・・・
私はまだあと三、四人は知っている。

ライオン

ああ、ライオンよ、どうと倒れた
王者の傷ましいイメージ、
おまえは今や、ドイツ人たちのいる、
ハンブルクの檻の中にしか生まれぬ。

野ウサギ

好色ながら臆病だなんて、あっちゃならないよ
雄ウサギや恋する男のようにね。
そなたの頭はいつだって
仔をはらんでパンパンの雌のウサギのようであれ。

飼いウサギ

私は別のウサギを知っている
そのウサギを生け捕りにしたい。
そのウサギの飼育地は、優しい人々の住む谷の
ジャコウ草の茂みの中さ。

ひと瘤ラクダ

四匹のラクダを連れて
アルファルベイラのドン・ペドロⁱⁱⁱは
世界をめぐる驚嘆した。
ドン・ペドロのしたことは、四匹のラクダさえありや
この私がしたかったことさ。

ゾウ

ゾウに象牙があるように、
私の口にも貴重なものが。
それは死者のような赤紫の色！・・・私は栄光を
調べの美しい言葉と引きかえに手に入れるのだ。

オルペウス

この下種^{げす}な一団を見よ
幾千の足、幾百の目：
ワムシに粉ダニ、昆虫たち
微生物、細菌は
世界の七不思議よりも
ロズモンドの宮殿よりも
さらにさらに素晴らしい！

ハエ

わがハエは唄を知っている
それはノルウェーの
雪の神々たる
ガニックのハエに教わったものだ。

バッタ

ほらここに、ほっそりとしたバッタ、
聖ヨハネが命の糧としたという^{iv}。
わが詩句もバッタのようであれ、
最良の人々のこのむ^{きんじき}養食となりますよう。

オルペウス

そなたの心は餌となれ、空となれ、清めの池となれ！
というも漁夫よ、淡水の魚であれ海の魚であれ
姿といいその味といい、
救い主イエスほどに美しい神さびた魚^vはいるか？

オルペウス

雌のアルキュオネ^{vi}、
恋、そして飛びかうセイレーン^{vii}、
こいつらは危険で非情な
死に至らしめる唄を知っている。
そんな呪われた鳥どもの声を聞くな、
楽園の天使たちにのみ耳を傾けるがよい。

セイレーン

セイレーンよ、おまえたちが夜半に嘆きわたる時、
私はそのもの憂さがどこから来るか知っているのか？
海よ、私もおまえと同じだ、企みをつのらせた声に満ちて
わが唄う大船は何年となく名乗りをあげている。

鳩

鳩よ。愛にして聖霊であるあなたは
かってイエス・キリストをこの世に送り出したという。
私もあなたと同じようにひとりのマリアを愛している^{viii}。
願わくば私も彼女と結ばれますよう。

クジャク

この鳥は羽をひろげ、
その尾羽はふっさりと地に垂れる、
さていやましに美しい、
でも尻が丸出しだよ。

フクロウ

私の哀れな心臓はフクロウのごと
釘を打たれ、抜かれ、さらに打たれる。
血も熱情も果てる寸前。
私は愛してくれる者たちを総動員する。

朱鷺

そうだ、私は土の翳りへ赴^{おもむ}こう
ああ、確かなる死よ、かくあらしめたまえ！
死すべきラテンの者、ぞっとするような語りだ。
朱鷺よ、ナイルのほとりの鳥よ。

去勢牛

かの^{ケルビム}智天使は天国を讚えている
その天国で、天使たちのかたわらで、
われわれは生き直すことができるのさ、諸君、
神さまがそれをお許しになればの話だけだね。

-
- ⁱ オルベウス：ギリシャ神話に登場する吟遊詩人で、一説にはトラキア王の子ともいう。堅琴を見事に奏で、彼がつまびくと森の動物、木々、岩までが寄り集まって耳をかたむけたという。また、妻のエウリュディケーが毒蛇に咬まれて亡くなると、妻のあとを追って冥府下りをした、という伝説もある。
- ⁱⁱ 『ピマンデル』：ルネサンス期、とくに16世紀にヘルメスの書とされるものが流行したが、『ピマンデル』とはその類いの書をメディチ家のサロンの一員だったフィチーノがラテン語に翻訳したその書名。
- ⁱⁱⁱ アルファベイレのドン・ペドロ：15世紀前半に生きたポルトガルの王子で、十二人の伴とともに四匹のラクダにのって、世界の七つの地域を巡ったという。
- ^{iv} バッタ：聖書によれば、イエス＝キリストの従兄弟、洗礼者ヨハネは荒野で修業をし、ラクダの皮をまとい、イナゴと蜂蜜で飢えをしのいだという。
- ^v イエスと魚：ギリシャ語では魚はイエス・キリスト・神の子・救世主の頭文字をつなげた語となり、初期キリスト教ではイエス・キリストの隠れたシンボルとして用いられた。
- ^{vi} アルキュオネ：ギリシャ神話の伝説上の鳥。
- ^{vii} セイレーン：同じくギリシャ神話の怪物で、上半身は女、下半身は鳥の姿をしており、歌をうたって通る船の男たちを惑わし、難破させたという。
- ^{viii} 当時アポリネールは女流詩人にして画家のマリー＝ローランサンを愛していたが、この恋は実ることはなかった。

*なお、本稿はアポリネールの『動物詩集』の詩句のうち、すでに『外国文学』60号に掲載したものを省いた全ての詩句を訳出したものである。